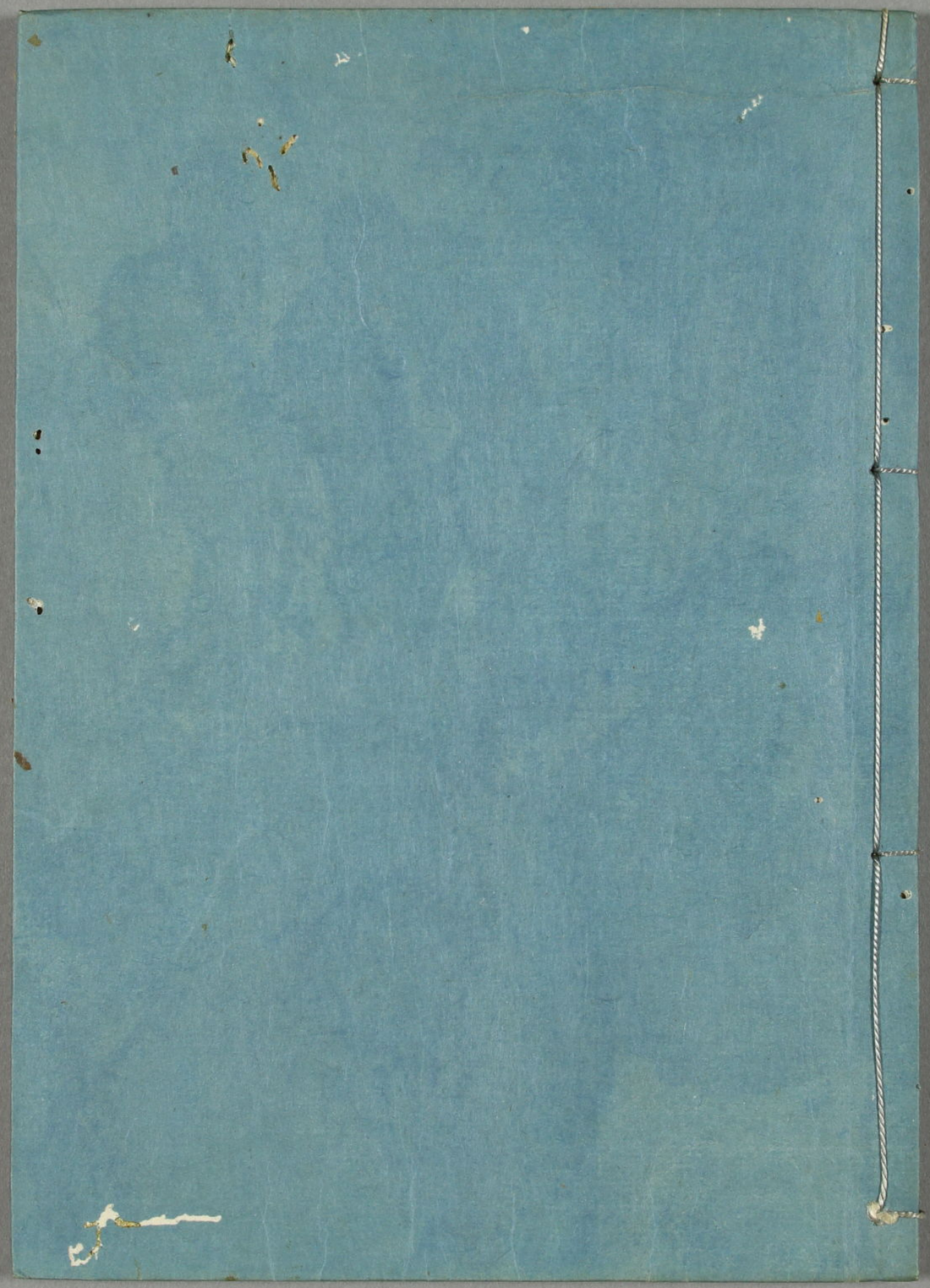


酒竹文庫

身底記

一此書は細川藤孝法名玄旨に爲尤大納言光廣卿
數年ら和歌如し問答并當座の物語抄ようれ
ともなり。偽云を以て書写の行わやしと
いへども。一点誤あらためず。如本うつし出を則況文
乃為ようの自筆也所詮判形をも記置し者ようを冠らむ
一西年ちかくなりあるとうをもくをもくを。書家乃
ためうしかうひうくれようをもし侍りぬ
一元右衛門をひくもく小正なるよい大なる上乃由まるこ
下白だうり。門出さる迄うり。今光長の八七ちあふ
上下乃面白ようを勞かし。開板をしむるなり

酒竹文庫

耳底記

奏

耳底記奏之一

尚耳口義

文長三戌年

八月四日

光廣記之

吉田の兼居をうれしくおもひ侍るまゝにがちやくとあひ
まうさばやいろみをかたりさそがまゝ愚筆
らいれいなりさそがまゝ愚筆
ゆゝし道者とみえきり

一 問云。和哥乃伊勢物語を改てあり。定家卿製作
まうさばやいろみをかたりさそがまゝ愚筆
答云。定家乃製作の源氏をそれまた

あきらかにあらはるなり。定家の製作とやうの
そでなきおほくはこれなり。摂家本。清書本。相
史相。はあ相。定家の製作の書ぶりあらず
摂家本。奥書まで。所在の迹とも
投口の筆跡のよいあらざるなり

一　向定家の製作のうちおくも。二条家。北畠家。
　　よ用捨の分あり。俗本大概ちがやる
巻いづれも通用とやうあり。
百人一首ばかりは。別して家ごとの
よ用ゐなり

一　向むかしの歌をみるは。序歌おほし。金代

きくみまくぞめの
書序。いにしへのしらくもきものぐるるうきもれば雲しん
おもふとやうなるし。書いたやりたるとみしくり
今もしらぬ所をきくうしのごとくよむ
べきよもみまぐ。逍遥院殿のしらぬ所を沸覚
ひく。おほくは所をわるまじきなり
一　歌をよむにあたりてもこの自くようれぬ歌
そもそもいつくの業ぶるぶ。功をさしし
うれを初はぐきをとうくしをとうなどして
をくがうの紀なり。紀歌をとみもはしるぬおあるぶ
こと。はくじ。必次。枕。などいふ所ありるものい

あらくもなりぬるよまれぬ歌なり
一野とやふことあり。三条院後古今に侍るよのとの
ぢ
ゆくすゑくきうせくれあり。つゆの中ぬれ。こりよの
人家ぬ。三ゆふきあぐてぬしくるぬよ面白
所あるものし。かしこまりし中ぬなり
君が代ぬ一人ぬなり。ちてさくし
ふきあぐすぬ。あまのの人のちぬすし
一代ぬ代ぬをちぬ。一枚ものをみるが
ちやあくよろなり。まぐ奇をよみ習べ
一番代の所ぬ。みるまきあし。いつあるぐりて。ち
つさなり。奇ちさゆうあるぐ。ゆうきんし。表撰

法師。わうのかをぬ奇。人のいくともたいそいぐう
あるちぬ所なり。物をいのしとちるおるぬ
所いうゆうあるとみえうり。古今ぬ序ぬ秋の月
ぬあるうきのをよなりくるぐぎくしいつも。面
白といふんし
奇ぬようかるぬ所ぬ侍。ちうぬ所ぬみもあるも
あるくものぐ。ちうくあくとも。あるひよあるりぐ
いあるふぎれどもあるぐいあるまい物し
同所ぬしといふ。てよん。うるぐひぬ
ぬうるがひうあるぐず。あるあるしといふもある
といふんなり

一 ゆうべ乃よみ侍るべし

一 人のかたりとわつらひ侍るに。きうそくする時でゐけるに
ぐにもとゐもたれぬものし。いうさ面よりかるの
口伝。いのくまうせんといふことゝ。ゐ〜ぬ物し

一 家隆ゐどのゐる。を代い。道遍院殿三光院殿
乃とみるべし

一 集をゐるる。花宴をゐるけるとゐ在あ迄ど
もそれをゐ〜ぬことゐり

一 定家家隆と中よりかたることもゐて。後京極
殿と。一座わしぶがるより者ゐとみゐり
一 彩勅撰。定家自筆申給いることゐり。爰ゐく

ゐをゆべし

日月八日

一 向云 ゆうみぢうりちる山乃ゐ時面ぬ迄てや
ちるのひとりゐ〜んゐ中 弾白うはぐき
ふるゐや
若はぐきゐ。ゆゐ時面よぬ迄てやとゐんや

一 向云 恋ゐびぬ。ゐ弥乃ゐ文字をゐぬことゐや
答ゐゐぬゐよゐ〜ぞ。恋ゐびぬといふく。ゐよ
恋ゐびぬゐ乃理をとゐれいよ紀なりゐんこと
ゐ〜ぬなり。恋恋いなどいふゐ文字も日前し

一 問。哥ハ面白からん。詠ぐさあるよき歟

答 面白からんとはげしきをまなびてつくりし哥なり

是らハいまだ此の山の麓にわけいるまでなり

うきうたも今ハ面白くむ。此哥詠ぐさまざま也

今つくりてむとはいふが。諸白(そく)なるによりて面白し

おもしろき。諸白の哥に面白きあるなり

問 花鳥の姿(いろ)をうつくしくべしや

答 さもあるべからじ

問。うきの有さなるもの。いかゞ見るべきや

べしや

答 萬蝶(ゑびこき)やたきぎの樵きしよりかきつる也

おくよかなおしきと。此哥いまさなる哥なれ共ためし

二 作まるべし。天地のめぐりしてよもとわかりつゝ。さて

約をふくみ。色をとらけくおもしろくよむべきや

二 詞の哥ハ余情(よせい)を。あまがちよまんとせんはあれ

ども余情のぎりなくなりつゝあり。むかしの

哥なれど余情多くありて古歌とみえたり。當

時の哥ハ。余情をのこせんとかつ悪ども余情

なし。うたさへ余情おのれなどよまざるなり

二 詠しといふは。なかなかいふものもあるなり

古今ちかやといふかく。むさと秘(ひ)をかづきよからず

三許し和哥定家の製作也

一奇よりみのうへ花を。さて奇れ目はよ紀目し
さて奇うらさとぞやとおもふ。うるさくもよくは
うしもよまさぬこ。をしめふきてて見ろさも
歌とさて奇とぞゆうふちづしあるものとみえうり

一　撫子花それとも見てぞ久うるれあまぎる
雪のうづくふまてだ。此奇面白き奇の項とと
ゆなり。みな蔬菜みく。久うるこのたまぎられ
たくさあるまでし

一制ことぞみくをてはてんの藤とてを
歌枕。三光院殿の歌をかきくを
多ありなり

一源草の等。さてをふくさ。ゆよむをくをふ
さと。よむとおもをこ紀
一古今の奇。伊勢がをぞれくを面白といふ
その中のことぞよ。これくとりてきこの目
おもしかぬし
一百人一首。一文字を。ふくきてぬやふみよむし
一海上なくいふ記して。浦とづりよみ孫なぐ
よめども。海と六字を。ふくるがよくなり
一俳奇大概。百人一首。百中記。未来記と今三記の
物とせういふ。おやまりし。を東殿のこいうん
殿なと。此三部をうき抜くを奥書うり三部此物

とあそんでなり。四部あそんぜ。に紙乃物
とのうぐぜるなり。ちうるを。御の大根百人一そ
面中をこれを三枚のかとといふを。人こてうふし
ちをするあやまりし

一ものをよむよ。かけなのいとつのものを。あらんで
嘉こいちんとてい。おくさだ奉れいい。ふとといたむとて
ぐ。むをちるる。みぐ。ぐるどいやうるる事し

月月十一日

一 詩田りもみぢ。むをぐる祇をのひりこ雪
のかり甘面ふるし。此奇紅葉いりしえ文をてふ

えこの

ちをよむ事なりと。三光院殿御ぐ迄に
いりうせんむりりやしまん者もぐれ意の
ちりを元よ面ぐんん。はれうりせんいつるひりよ
かちわたるし。後よ面をしるるふえまや

月月十三日

御所大板。えまみよこ。序の二返聽迄寄を
不寄ふんのぶんふれと問迄

一御所之大板。御乃なる。上ものと。平ものとりわりひり
ちむぐさなり。此類おりるさなり。衛の著みちの
さんぐや

謹 けそもゝ
ゆゑを
私云下効之
ゆゑ
為知物由

序

秀句 大略 痴蕉 者 といふ
定家のゝびをもめく向ふ
百しきの大家人 いとゝ
てゝ
春をぞ
来 但
以花 月
隆何 小町
源通
盛義
誰人

てゝあまのかぐや
ゝよりいつぞ
あとゝふる
白雪
人ゝ
とゝ
さゝりみも
ゝまや
タゞ
死なる人をゝ
洗 とゝ

くのまゝ
ゝ家者の
きのまゝ
をみくも
ゝひもし
ゝうん
をまのゝ
ゝのゝ
たのまもむべ
ゝ川のゝ

来りあそむとそでとも　海月のうれを湯べ
ゆのひりあまてぞあくあれ泡のうと
うと人よあそできうえめや　うるかるまて白を
きりて。人といつみやもをしべ

月月サ三日

秋の霧やあもとみいてく結ぶんもき
あるりぞやどる月うれ　けりるうるるや
若りうるんをもこうしりえ光を情のうりせ
んしうり。よせいといつみを。まてをもきあるいろう
もるうやどる月ぞるやよっかうなしうてでいるぐ

秋の霧の。紋よりてく結びあるゆまてあるて
さてもかなる。あがおもひみくるようといりぞう
ふりてこそ立ち光りいおるしうれ
袖乃霧もあるぬあるできえうるうる
むうるあぐめせしまに　けるの家とうのある
家しおるしうるさ
月あるとんべ関月のるぐ実でみる月の面
白きせんをこあるるさ光又関の中うなく
のこれをよみ月のるまてのこ池をうこて
関まてを月まてもとうこ入あるまでのへ
いぐなるぐるさぐ

春あるがら関の月のきんをいとゝも関よ
月をよゝへまじ。関の月面白さうなるあり
うれうらでもあるまのを紀なるべしこれを紀よ
ゐとりあるうはかけあるぬいろう
一月と可ふあるあるくあるなるべうひとゝ
夕月あるべしまぶをあり
一花れ可ふくるくちるとるるをとゝむあるさなり
況をよみ物をとゝむべし

月月サ四日

一百首なるべうとゝむうんあり。三十首だうりゝ

ことゝ
ちるす未歴まてよゝむべしそれよりあるくゝ
用なり見よ准じくるべし。十首まゝ三そ四
首ちるなるもう。ちるとをひくべし　我作
あくゝむにちくへるるさしよみくさのゝ作し
一さ人なるぬ人乃。あなるぬなどよまぬ物なり
そのゆををんでもきむしるけきむし。ねるぬなと
とゝむいさ人なる位乃人のすなり。久家大ゐ後
ぐ者と乃をはつきわりうを稚切院ひ話
なり。是拾とゝつく唐日なう二人名作あり
しぐ拾の智ちなるゝゆ人なり後方ゝ作し
一物などの。ひしきさとるをよまぬ物なり

ちらかす。ぬるひやりていまもべしうれしかるべき
てきよむべうず。歌方のは侍し
一ものくふ乃方おく。いさむこそうのなどいつみんを
よまぬものなり。うの乃方のうへ芝居なきだ
なり。まさに云家ゐ〳〵だ。たのみがうさよりを
よむものし。さきむ完家をたきしまのんちよ
家名い毎つの乃やいさまざまぞやまとと此家
ぬひよき侍てり後方此は侍也
よみさの侍百ゞりあり。書なてあさぶん。
除歌もあること。家死なるべ毎べきなり
一　向らんとるやとう。いうでとういんなびたのみれぬり

蒼ちなり。久うるのひりのどをきき云皆ホ
乃奇いんぞといつをへくみるなり河の外
よ年侍あるなり。家乃奇よいうでとたう
うて後侍し。此うるさい古今おくも稲奇し
又上うるはうまといひうるぞしうる覚あり元
家の奇よ。うるうよまあれいの侍まそたうん
見ハ侍うまといひるうしたるう。らんいまげ
うるがひうる。てよくし

九月九日

一番歌　相撲　八条殿あり。曰。奇合かとてうう

ある物をあしび。古人乃拍判を歩まくんし
奇会とのふらるあそせよ。わがみぬハるきや
大ゝこゝろてるなり

一　向云ふまくたゝの涙ハ流ハ
や袖乃ぬれもこそれ　ぬれもこそれを
いふてふ。ふたにといふんぞ
若ぬれてゝと。いふんや
一　遊不云意。弦遊ぶ人をなり

日月十一日

一　向云手水乃ちぐひとゝふ。ふるといふとれ

[illegible]
若。遊といふ。てゝ遊し。ふるといふハちぐひハ
せいぐ。紀乃ちんよりなぬを云也　廣私云拍不家

一　向　さびしくハ人ハ山里をとゝをびや
さでのうさのへとる法　ぬ山里をといふうの
ぬ文字。上下ふつゞきする必好なるよるきに
若ふさでもなしまるきでもなし　見も一神
なりとんるべし

一　向自撰奇いるれがあるまるぞ
若ゝ遊ゝ日ゝ乃ぬなり。ぬしくのえらひ出さ
遊ゝ者ゝといふ流ゝ。そよせん者流ゝふ。もちひぬ

なり。其類は自讃とある歌也。題にまたがるにゆへし

一 同 春まの何まの文字やくなり風といふこと

おもえぬることみたるびきなり。序哥はやや

昔序哥なり。此次云。むかしは序哥をやりとめ

多けり。今はそれほどくやらるさぬし。昔の序哥

は。序にみんのわるもかりいふよもわたらひう

あるなり。今は序にまんのなきはきらふ也。たとへは

かの衣と云て。きるとつりいふやうなるはきらふし

よろとも。あにとぞ下にいふあるや

一 同 花をさよ似あるは。作めずしかりぬり

答 いくよびもよむべし。此次云花をさよ似ある

はくろひあると見ども。似るを似るといふことを

つ縁をぬてよし

一 同 吹くるは小野への草木もしぼるれば山

風をあらしといふらん。此ごとくよ下まつぞ

ていよりなりされ

答 けもくりしかりぬなり

一 同 女郎花とよみくの花と又一首九首に侍べきり

答 よむべし

・同 本哥をとりくよみくる哥を又本哥と

よるべきか

答 とるべし。此次云 堀川院の百首まで本哥に

とも。そのうちでもよき人のをなかよとも
なりぞとれがゐるるの日
一　同下句字まてとゝもしるのあもしかゝぬう
　　答ふうず
一　同句業とゝかぶ。なかとゝんとうぞる月り
　　答うぞ歌あり
一　同十弟六義をかのくゝりふんづてあを
　　よむまや
　　答或いとれはじてよまんなどくゝかくゝむ
　　とあり。よさもなく自然うまむもなり
一　同いろさ面よいひろゝあるいあゝきや

答いひのこさきぬこゝをいひろゝをいなゝ。ぢる
きをば。いひのこゝろうつくゝきぬしぞいつの
あるるあゝきなり。ぞ歌いやゝたりのや
一　同面とんだ漁文きんよみをあゝてもむう
　　答漁文などうゝ方をあゝてもむるゝ人
　　などあは出ゝゝぞ
一　同百首など乃ぞは二そてけくあゝで
　　ものをよむるあゝき就
　　答んさんちゝんだ。るゝかゝぞ三首ハてきぬし
　　同乃あゝあゝぐ逢坂山乃さのぐて人り
　　ゝゝれくゝはもぐれ。人よゝれく清潔ゆ

答て乃字清濁無仮なり。それどもゐゐるが
ようきなり

一　同所林京枝集に。蘇武の作といつるたつ
なるう

答無しうなり

一　同わんとをうむ

答ならふみぞくふみとつてるとし

一　同もそする

答をせうぞくふみとつてるをや

一　同もぐさぐてまるるぞそうれんなりや

答なり

一　同年号乃義理をとりうんてゆるひるるや

答なり年号をうそくかういつへども。かうこそ
わをなどくいふ。蘇武。楽ををるなり

同てるもちぐひとい義理乃道をいつや

答いえぬなり義理いい。ぱ次云てるえい
云東ものなり。又ぞはけるこそれとわるぐうみ
いうくうよでいるるきをきてうう

或人。二条のたこやくしをとりうきぬよ人へや
ゆくべし。うんやゆくべしといふあるを。きるそう
ものが生てよへうりともうんりうもりたき
やうふわぐやわを。うりるぐうてるをそ。云東

ものちやそなどよ。みをひく。れたりわまと云
なり。問答終
一ゆかりよみるゆづりてをりてうたうむるまき
いそなむいるんとものえもあり。乃歌なり
一学問いこぢきぶんろう乃御ろるよ紀と。ろの初
やりんが書たるものよなり。何をもまげとり
へく。さてろうなり
一月ノ為のろうらの乃めよ色ものをもうたうし。奇をもろう
なり。んをさぶめく何をもとむ品がよきさや
一月ノろりをとぶまい品ものひきりてとぶよ紀し
乳歌なりごもの。たうしん紀づろおや

一背指乃うれ毎ろて。てよもろるれ。みうものろう
分業と可ものあり。がーナべー
一定家乃かう迷う地よ。ろうまれぜうとめさと
よめされもきぬ号ひ。めされくもよくかるよ
のりてづるやうなるなりうきなりとる
一野と可ものよ。まをよう。里と可紀う竹を
よむいさうみろう。かうぞ。それハトみたく地
なり。自情よりてようさし
一昔い。百首乃奇み地奇と可ものく七八十首程を
きうぶくと二日三日ふよみてのろる二三十
首の奇を。一そを十日まもサ。ロよもようり。行せ

道遥院さ。今北面とあるものしく侍らんも一会
さうけもちのさ言なるべし。世を隠し業にして
さてのみ一部わんじて。二三十首をよむべき
歌いさうよむと道遥院後作さ世あるとや。
一新古今ありとも。古人乃言ならべ申言よみ
一名所をあつめらるものよろこと言ものの
口冊わり。毎とんだ。御子と別石とをよみ所
とも毎るやうなるあるべし
一又まかりてよみ乃言をも。二の句へ
新色をえんまてろ
一十首　次才不日

有心躰　長高躰　可珍躰
一節躰　撰思躰　麗躰
濃躰　幽玄躰　次玄　自躰　見振躰
面白躰

十二月廿日　百首之言合点乳を用ル
寄ナくろみべきるよ古人乃

一百首之歌言　立春
はめつらの乃ほ紀くとれとあけ是先まず
みをそもる春の夕くれ　ひ言をそ思あこと
あらし乳言い。ちりあ言と古人ないとれるも

一　向玄　月

潮色をあらため侍るを見よとて
いづ道秋乃夜の月見てづ道とんれあるや
答さもあるべし。秋夜月見てうひりのきぐみく
ままきれり此夜云まうきぐよぞりと信べきこ
一 同そよさうみとりみんりうある何よりや
答さうみとりあるこ。そうぐうさももらせ
てもよむあり

十四日

一 同云 麻
里きうさ山田乃稲葉みまうさせこそうし

きうあくこそぞきこゆる。此他の用あるつ
かうむや
答きうず一位よりなり

一 同云 暁
あうき道めるあけうきあをきうくよかつる
ほすなメノ ほのひ乃 稲ぎめるうん。ぐうよ出まべしや
答すあるあうき道めるとんなし

一 同云 五月雨
濁おうる 道いさぐりてあくぬのをれ八重
きりあるあ乃を。此文字いつきもあきれ
答あ乃文さぐれの時ふいきんでもあうあぐる

ものなり。遊ばされたるとあるべし

同遊ばされたるとあるべし

なるべきことなり

答きこゆべし

同文字乃頃のモ　文字とい。中ノモ七文字とヤ乃ガ

答ノ也

同一乃ヲてのモ文字ノ名なり

答ノ也のモ七文字といつなり

同下句乃上のモ七文字ノ

答いまるべきこと

一歌ノ云　美濃ノ人遊ハ手ノ歌ぬるめられ

歌ノ葉ノ發句なり。手ノ歌ノ

句ノ手ノ歌

廿四日　於伏見

一　同ノ云　亀ノ手ノ歌ノ

答下句乃つまりノ手ノ歌ノ

なるを寄とい。下句ノ

をいつし。尾ノ手ノ歌ノ

みく。うノ手ノ歌ノ

一　同ノ歌ノくといつ文字ノ

答てんノ手ノ歌ノ

月廿五日

一 同定家の云ふ事あるこれも道遠院の
どのいまとはいふこれなるやありや
春あり

一 同人九定家卿実隆公乃用弁をもこれやこれ
うたりもてきこしてるで
春時代乃うりハあるべきとつぐも皆月ど
ものなるべしあり乃ものこれなるべしまた
一 光定用弁をなとをもとめてきたり。正用弁をよみ
ものまなばる。反まいりあるやあるや

一 ふるよ。ひくことあるふ。とづかるものおくをし
ゆるかりなし。初んん乃財をやきるゆ城をしゆ
道ぐちぐらるものあり。えをあることをそえうう
ものまなるまなるず

一 三乃乃中庸ハ定家家隆也

一 道遠院ハ家隆乃うるをはあるをあり乃なる
さみえうく。道遠院はをみるトタつるき
一 同云。小兵の行と制乃行との差別かる
春制乃行と云ふ。てづぐ業制をるし。小兵とハ。
制の行まいなるぐ。用物あるべきことなるの
中くまゝ。ひぐ意ふ。なすど小兵也

一 光廣卿 家集をうて 梅檀をうむ ぜんだんじん
てせんるを 他こ。めいしきるはまことよ
れがでいぐいといつやうやうびを さ
あるをよ。ちるをなるさしせうく。そ
うくあるべなりまり
一早春 初春乃うるけやうい。早春ハ元日カラ
二月三日のなひぶ。初春をるる日六日をいふまり
又立春乃事い。早春ハ春ハいわゆ。早春乃事ハ
立春ハいわゆ
第六日
一 向云 朝見花ヲ

こゝろ
くそくみさきそよ花の色をわや 世
わさけ乃八重の白雪。ゆきいむとりはまの乃
せんをよをそくゝ 多とをそくるやうし
夕紅葉
詠田姫をのをそくてよりけくをる秋の夜
をぬきもちるめず 此ものゝ夕とをせんありと
あべゆ。夏業夕 ゆ業とわる紅ゐいめゆを
いつと。紅葉といつの二種うり風情をもめ
よみ出さるをこと
答云 朝見花と云紅の事ハでくくようみるを
あるさなるを。ゆどゆ多といつせんをそくゝ風

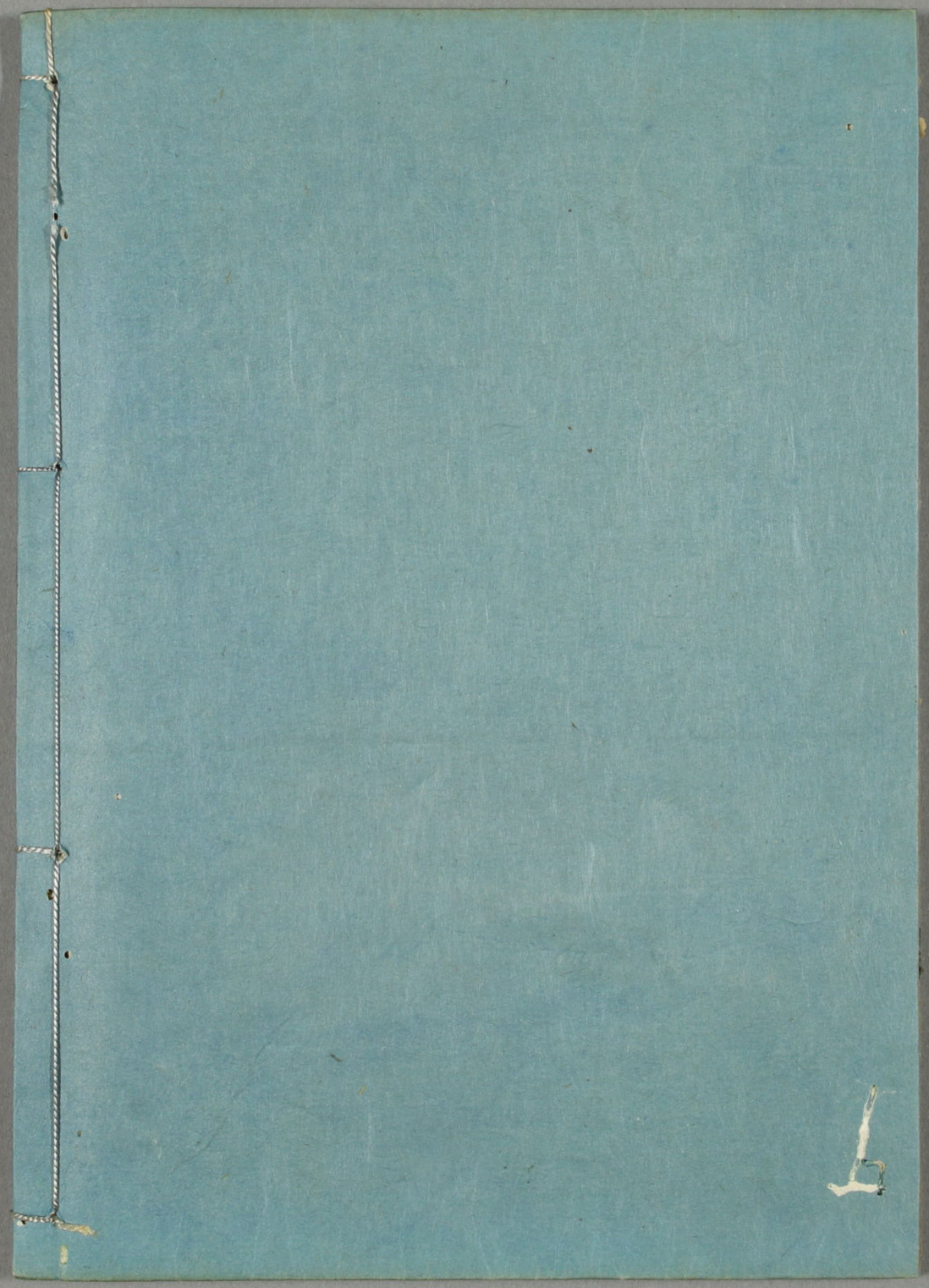
情をもあたるまはさるべ

同　為後月

うきくりのりびつて新まし無ぶ
ぶ。あしをよ月ぞなれゆく。見いきのこの
あまてまれ。おとくいひ乃和みくまれ為れやう
よきこめ法ひのよかるれり
答たり定家のい。自由りじゆうざい立
一在原中将なりれ書を清一乃習なり古をまて
ひとりのゆきしまなり
一人書のをびくとい迷ものし
一ゐにでまれうきめきく。それよ鳥をうけて盛く

一　おぐゆるようさし一乃習也和歌のなり
ゐやの秋乃々芳。ひ三ゐいい暗立沢乃ゐをうう
やみくようさし。ひゐ乃和歌乃ゐよくひうりゐれが
ようさし。ひゐ乃ゐもゐくうゐれたも。
道い一也。何のゐをゐくさうを面白京和をゐくり
ひ次ゐ一そう笛。いゐうものゐりとし暗立沢乃ゐ
時の立よあうきを乃ゐ
ゐりがうい。いゐ自分の道理し

一　同　水鳥

ゆうもむを明乃月ゆうゐ無なゐ

名をうきものとなづけなくかれの風雅をもてはやし
春の日くらしむらちるみをよみあるをよし
このこゝろむきなりしく
一定家乃云ゝ
又云作い道中よ金をもとむるやうなるものゝ
一ゝ
かさゝのくよまぬものなり
朝霜乃ゝ
是家春日こゝ時かめられある春日こゝかさゝて
宮狐りこゝ
ゝ是をもて
ゝ